Vol. 116, No. 2 February-March 2019

題字　一萬田 尚登 第5代日印協会会長

月刊 インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化・人的交流に貢献して 116 年）

変貌するムンバイの象徴
高速道路「バンドラ・ウォーリ・シーリンク」（Wikipedia より）

目次

1. 協会主催 新駐日インド大使 Verma 閣下の歓迎レセプション …… P. 3
2. インド大使館での上映会「スバス・チャンドラ・ボース、忘れられた英雄」 …… P. 4
3. インド三大銘茶と茶園の取り組み　～オーガニック農法と社会貢献～ …… P. 6
4. ジョージ・フェルナンデス元インド国防大臣を偲んで …… P. 11
5. インドニュース（2019 年 1 月） …… P. 13
6. イベント紹介 …… P. 16
7. 新刊書紹介 …… P. 18
8. 掲示板 …… P. 19

1. 協会主催 新駐日インド大使 Verma 閣下の歓迎レセプション

Welcome Reception for the Ambassador H.E. Sanjay Kumar Verma

日印協会 事務局長　西本 達生

＜開会の挨拶に聞き入るご来場の皆様＞

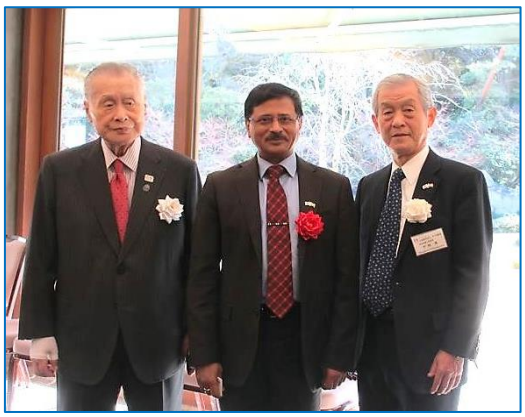
日印協会は、去る 1 月 18 日（金）に六本木の国際文化会館に於いて、このたび着任された Sanjay Kumar Verma 駐日インド大使を歓迎するレセプションを主催しました。

御用始めからまだ日も浅く、時候的にもまもなく大寒を迎える寒さと懸念しておりましたが、当日は比較的穏やかな晴天に恵まれ、午前 12 時からのランチタイムにもかかわらず、大勢の方が集いました。

法人会員企業や個人会員のほか、会員ではないがインドでビジネスを考えている方、当日に合わせインドから来日したインド人会員も参加。招待者としてインド大使館からは、Raj Kumar Srivastava 首席公使以下 5 名、外務省から滝崎茂樹 南部アジア部長、吉武将吾 南西アジア課長、ほかを迎え、当協会役員各位含め総勢 100 名超の規模となりました。

レセプションは、平林博 日印協会理事長による開会の挨拶に始まり、森喜朗会長からの挨拶、そして Verma 大使の着任挨拶のあと、比良竜虎理事による乾杯の発声へと続き、食事とともに歓談及び名刺交換が始まるという流れでした。

平林理事長は開会の挨拶で、Verma 大使の略歴披露のあと、「50 代前半の、大使としては若手だが有望な外交官であり、日印関係の益々の発展に必ず貢献してもらえると期待される。日印協会としても緊密に協力して、大使の成功に貢献したい」とのメッセージを贈りました。



＜Verma 大使を中心に向かって左に森喜朗 日印協会会長、右に平林博 理事長＞

森喜朗会長からは、「モディ首相と私、森(モリ)は、名前が似ているだけでなく気の合う間柄で、これまで良好な日印関係を築いてきており、Verma 大使に来ていただき、日本としても大歓迎である」と祝辞がありました。

以上を受けて Verma 大使からは、「私は若輩でかつ日本は初めて。新参者だが、既に深くなっている日印関係を、さらに高めるのが自分に課せられた役目だ。ここに参集された企業はじめ皆様、および日印協会の森会長、平林理事長、比良理事からの激励に心からお礼申し上げ、ご指導を仰いで頑張っていきたい」との答礼がありました。引続き平林理事長から、インド大使館からご出席いただいた Raj Kumar Srivastava 首席公使、Avnish Sharma 領事担当公使、Prof. Siddharth Singh VCC 館長ら一人ひとりの紹介がありました。

＜スピーチをする比良竜虎 日印協会理事と Verma 大使＞

比良 理事の乾杯発声が終わるや否や、ご出席の皆様が Verma 大使との名刺交換で列をなし、最後までその列が絶えることなく、はたして大使におかれては十分に食事を召し上がったかどうか気がかりのうちに、閉会となりました。

この誌面をお借りし、ご多忙のなか出席くださいました皆様には、心からお礼を申し上げる次第です。

2. インド大使館 VCC での特別記念上映会
「スバス・チャンドラ・ボース、忘れられた英雄」
Screening the film “Bose, the Forgotten Hero”
at the Embassy of India in Tokyo

日印協会 参与　宮原 豊

先ずは、この 4 時間近いインド映画の日本語字幕の監訳をされた大阪外国語大学名誉教授 溝上富夫先生（個人会員）に敬意を表し、上映前の先生のご挨拶を紹介したい。

「2005 年にリリースされたこのヒンディー語映画の日本語字幕を作成しましたが、そこには政治的な意図は全くありません。この映画は普通のボリウッド映画と違って地味すぎてインドでも大ヒットはしませんでした。また、当初は熱狂的なボース支援者から、チャンドラ・ボースは Unforgotten である（今も忘れられていない）、オーストリア女性と結婚していたというストーリーは認め難いと、コルカタで上映禁止の訴えが起こされました。しかし、インドの寛容で重厚な民主主義のもと、国民的人気の高い“勇気と愛国心の英雄”チャンドラ・ボースの映画は上映されてきました。日本語版は商業目的というより教育目的であると考え、それに耐えるよう歴史的事実を十分に踏まえて翻訳に当たったので、大学等で歴史の勉強のためなら無料で USB メモリーをお貸しします」とのこと（貸出を希望される方は日印協会までご連絡下さい）。

溝上先生は映画の字幕翻訳の仕事は初めての経験にもかかわらず、字幕は見やすくて分かり易く、とても初仕事とは思えない見事な出来映えである。IT に強い若者（大阪大学の教え子）の協力により、翻訳から字幕まで無料奉仕で完成させたそうだ。

映画は、会議派内の路線の違いから議長を辞任せざるを得なくなったチャンドラ・ボースが、第 2 次世界大戦勃発をインド独立の絶好の機会であるとガンディーに蹶起を促したものの受入れられず、非暴力抵抗のガンディーと袂を別つ場面から始まる。ストーリーの前半では、断食をして獄中から自宅に移され、1941 年 1 月に自宅軟禁から逃走し、ペシャワルからカブール（アフガニスタン）に逃れ、各地で苦心惨憺しつつイタリア人外交官等の支援を受けて 4 月にベルリンに到着するまでが描かれている。ここで注目すべきは、宗教や民族の違いを超えて、ボースは各地で人々からの支援を受けたことでも、ボース個人の人気が高かったこともあるが、対英独立達成への期待が大きかったことを表している。

ストーリーの後半は、ボースがドイツ軍の捕虜として捕えられていたインド人を結集し、自由インドセンターを組織するところから描かれる。その後、アジアでの活動を目指して、1943 年 2 月に独 U - ボートでヨーロッパを脱出、マダガスカル沖で日本の潜水艦に乗り移り、いよいよアジアに登場する。そのような中に、オーストリア女性との結婚・出産、そして親子 3 人のつかの間の生活が挿入される。アジアに移ってからのボースは極めて多忙で、43 年 6 月、日本に亡命して独立運動に従事しインド独立連盟（IIL）とインド国民軍（INA）を創設していたラス・ビハリ・ボースから、シンガポールに於いてインド独立連盟（IIL）総裁の地位を委譲され、自由インド仮政府主席就任、インド国民軍（INA）指揮官に就任する。その後、チャンドラ・ボースは、対英米宣戦布告し、11 月大東亜会議（東京）にインドを代表して出席する。1944 年 3 月には、日本軍のビルマ方面軍と提携し、インパール作戦に突入するも、兵站不足や気候が災いし、目的達成を目前にして敗退、ボースはラングーンに戻る。その後も INA 増強や武器供給を画策するも、戦況は改善することなく、その間に日本は広島・長崎の

原爆投下を受け敗戦を迎える。

映画では、外電によりボースは台北の空港での事故で死亡したことが伝えられる。その後、デリーのレッドフォートでインド国民軍（INA）幹部３名（シャヌワース、ディロン、サイガル）を被告とする軍事裁判が行われる。しかし、インド国民は「被告人も抑留被疑者もINAは全員がいずれもインド独立のために闘った同志である」と被告やINA全員の解放を求めて立ち上がり、インド全土に大きなうねりとなって広がり大騒動となったことが描かれ、スバス・チャンドラ・ボースとINAがインド独立を促す原動力になったと結んでいる。

さて、今回の映画上映はインド大使館ヴィヴェーカーナンダ文化センター（VCC）主催で開催されたものであるが、この１月23日はスバス・チャンドラ・ボースの（数えで）123回目の誕生祭であった。また、この記念すべき123回目の誕生祭の１月23日に、INA軍事裁判の舞台となったレッドフォートに、インド政府はネタージ・スバス・チャンドラ・ボース博物館（Museum）を開館した。コルカタ市のチャンドラ・ボース記念館（Netaji Research Bureau）に併せて、首都デリーにもネタージを記念する施設がオープンされたのは喜ばしい。ちなみに、今年はマハトマ・ガンディー生誕150周年記念事業が各地で営まれているが、ガンディーとの年齢差が27歳あったことが分かる。

＜チャンドラ・ボース博物館開館式（インド首相府HP）＞

スバス・チャンドラ・ボースは、1945年８月18日に台湾・松山飛行場において飛行機事故で死亡（48歳）したが、遺骨は、極めて困難な状況の中を東京まで運ばれ、杉並区の蓮光寺に収められた、毎年命日には多くの関係者により追悼されている。その期間は既に74年を超え、母国への遺骨返還の話は何度となく持ち上がり実現されるかに思われたが、未だに実現していない。スバス・チャンドラ・ボースの遺骨がいつか母国に帰り、インド国民に見守られながら安らかな眠りに就かれますようにと衷心より祈念する。

3. インド三大銘茶と茶園の取り組み
～オーガニック農法と社会貢献～
Organic Farming of Indian Tea Producers
~ Contribution to the Societies ~

有限会社マカイバリジャパン　インド・ニューデリー代理店　社長　　石井 吉浩　個人会員

＜インドは世界最大の紅茶生産国＞

世界の三大銘茶は、インドのダージリン、スリランカのウバ、中国のキーマン。では、インドの三大銘茶をご存知でしょうか?

インドの三大銘茶は、ダージリン、アッサム、ニルギリです。

インドでは日常的に甘く煮出したチャイと呼ばれる、ミルクとスパイス、砂糖のたっぷり入ったミルクティーが家庭でも露店でも飲まれており、世界でも有数の紅茶消費国です。紅茶というとイギリスのイメージが根強いですが、イギリスでは紅茶は生産されておらず、インドやスリランカ、アフリカなどから紅茶を輸入し、大量のブレンドティーをつくっています。ブレンダーといわれる高い技術を持った職人が、毎年同じ味と香りを保つために紅茶をブレンドするのです。それぞれの国の水質にあったブレンドも技術の一つで、日本でも有名なブランドの缶に入った紅茶は、イギリスでブレンドされた紅茶が多いのです。

今回は、インドの三大銘茶と共に、茶園を取り巻く自然環境を大切にし、働いている人々の生活向上、そして持続可能(Sustainable)な経営を実践している、3 つのオーガニック紅茶園をご紹介します。

1. ダージリン ティー（西ベンガル州）

まずは、世界三大銘茶の一つであるダージリン紅茶。紅茶のシャンパンともよばれ、世界の紅茶愛飲家を魅了し続けている紅茶です。上品な香りと風味を楽しむために、ストレートティーで飲まれることが多く、春摘み[ファーストフラッシュ]、夏摘み[セカンドフラッシュ]、秋摘み[オータムナル]の年３回の茶摘み時期があり、それぞれ味と香りが異なる旬の紅茶を楽しめます。ダージリン地方は 1850 年代にイギリスの植民地として、避暑地および紅茶の産地として開発されました。世界最古の山岳鉄道、世界遺産としても有名な「トイトレイン」は、当時イギリスの産業革命の影響を受けて、紅茶を輸送するために導入された乗り物です。現在では観光名物でもあり、また、人々の生活の足として活躍しています。ダージリンには現在 80 以上の紅茶園があり、その中で最も歴史ある茶園の一つがマカイバリ茶園です。

【マカイバリ茶園　Makaibari Tea Estate】

「マカイ」とはとうもろこし、「バリ」は肥沃な土地の意味。茶園ができる前はとうもろこし畑だったのが名前の由来です。1856 年からバナジー家によって創業されたマカイバリ茶園は 4 代目のラジャ・バナジー氏が 2018 年 3 月に退職するまでの 150 年以上を、バナジー家が 4 代にわたって茶園経営を行ってきました。現在は、財閥ラクシュミ・グループがバナジー家に代わって経営を行っています。

ラジャ・バナジー氏はダージリンで唯一茶園に住み、紅茶の栽培から出荷まですべてにわたり携わった異色の経営者でした。「Sustainable(持続可能)、Holistic(全体的なつながり)」を経営理念に掲げ、そのためには「Growing Together（共に成長する）」の必要性を説きました。バナジー氏は、茶園労働者を「従業員」と呼ばず、「コミュニティ」と呼び、自然界に存在する

＜４代目マカイバリ茶園主ラジャ・バナジー氏〔本名スワラージ・クマール・バナジー氏〕（©Jean-Luc Luyssen）＞

「人間」「動物」「植物」は平等であり、互いに関連を持ちながら共に成長すべきであると考え、実践してきました。

＜マカイバリ茶園茶摘風景＞

マカイバリ茶園の広さは 670 ヘクタール。東京ドーム約 142 個も入る広さです。4 つの山を所有していますが、すべてを茶畑にせずに、茶畑の 2 倍の広さの原生林を保護しています。原生林の中には野生のベンガル虎が 2 頭（WWF に登録）、ヒョウが 18 頭、その他に鹿や猿、兎、野鳥は 300 種類が生息しています。その中には村が 7 つあり、約 1700 人が居住し、コミュニティを作っています。まさに人間、動物、植物が共存している珍しい茶園です。

マカイバリ茶園では 40 年以上前に農薬・化学肥料を使用しない、ルドルフ・シュタイナーが提唱したバイオダイナミック農法を紅茶栽培に導入しました。バイオダイナミック農法は植物が持っている生命力（バイオ）を最大限に引き出すために、天体の動き（ダイナミック）も取り入れた農法です。満月の日に茶摘みをしたり、牛の糞やハーブでつくられた調合剤といわれる肥料を蒔いたりします。

加えて、パーマカルチャー（例：紅茶だけの単一の植物を育てるのではなく、多種多様な植物の中で紅茶が育つ）やマルチング（グアテマラ植物を土の上に敷き詰めることによって、雨季は崖崩れから守り、乾季の時は土からの水の蒸発を防ぐ）を紅茶栽培で最初に実践していたことも、美味しい紅茶がつくられる背景にあります。

ラジャ・バナジー氏は紅茶生産者として初めてのフェアトレード生産者でもあり、人々の生活向上にも力を入れました。ダージリンでは、茶園で働く人々の給与が西ベンガル州政府によって決められていますが、その給与だけでは、人間としての豊かな生活を営むことは難しいのが現状です。そのため、働いている人々が経営に参画する仕組みをつくりました。

＜マカイバリ茶園の牛＞

例えば、各家庭に牛を飼わせて、牛の糞をマカイバリ茶園がバイオダイナミックの肥料として現金で買い上げます。また、オーガニックの草で育った牛のミルクはマーケットに持っていくと高く売れます。牛の糞は自分たちの庭の肥料にもなり、そこで育てるオーガニック野菜を売ることで現金による副収入を得られるのです。牛は副収入が得られる大切な動物で、人々は自分の牛の世話をしっかりするようになりました。牛を買うお金はフェアトレードから得られるプレミアム（報奨金）によって無償で借りることができます。

ホームステイプロジェクトを実施し、世界中からマカイバリ茶園を訪れる人々に村の人の家でホームステイをしてもらいます。泊まる人は茶畑に囲まれた環境の中、1 泊 3,000 円で宿泊ができ、オーガニックの食事と紅茶を楽しむことができます。村人には、宿泊料金が入ります。マカイバリ茶園ではコミュニティをつくり、フェアトレードによって得られるプレミアムを自分たちの生活向上のために使うことができるようになっています。

※フェアトレードとは　直訳すると「公平・公正な貿易」。つまり、開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す「貿易のしくみ」（フェアトレード・ラベル・ジャパンのホームページより）。

＜生産者を大切にするフェアトレード奨励金による福祉や、女性に対する取り組み＞

＜マカイバリ茶園の診療所
医療費もフェアトレード奨励金でまかなわれる
(©Jean-Luc Luyssen)＞

＜マカイバリ茶園の託児所
女性の声から生まれた託児所　(©Jean-Luc Luyssen)＞＞

マカイバリ茶園を退職したラジャ・バナジー氏は、現在は、小さな紅茶生産者にオーガニック指導を精力的に行っています。彼の理想は、インド全体がオーガニックに切り替わることです。バナジー氏は 2002 年 11 月 21 日に「インド総合経済委員会」の推挙で、素晴らしい個人的業績と、国家に対する顕著な奉仕に与えられる『ラシュトリヤ・ラタン勲章（国の宝石)』を授与され、イギリスの国営放送局 BBC が制作したインド独立 60 周年の特別番組の中で、インドを代表する 60 人の中の一人にも選ばれました。同氏が、マカイバリ茶園でパイオニアとして取り組んだプロジェクトは多くありますが、紙面の関係上ここでは割愛いたします。

2. アッサム ティー（北東インド・アッサム地方）

インド最大の紅茶生産量を誇るアッサム地方。北東インドのブラマプトラ河の両岸に広がるアッサム平原に、茶園が広がります。インドの中でも雨が多い地域で、肥沃な土地でアッサム種の紅茶がつくられます。山岳地帯のダージリンとは違い、熱帯モンスーン気候の中で紅茶がつくられています。アッサム紅茶の特徴は、何と言ってもパンチのあるコクと深い味わいです。ダージリンと対照的で、ミルクティーにふさわしい紅茶です。インドでチャイとして飲まれている紅茶は、アッサム紅茶の中でもＣＴＣ（Crush Tear Curl）と言われるコロコロと丸まった茶葉で、インドではミルクで煮だして日常的に飲まれています。その中でも、ユニークなオーガニック農法を実施しているのがハティクリ茶園です。

【ハティクリ茶園　Hathikuli Tea Estate】

ハティクリ茶園（Hathikuli Tea Estate）はインド・アッサム州中央にある茶園です。茶園の広さは全体で 687 ヘクタール、茶畑は 467 ヘクタール。

アッサムの茶園の中で唯一、ユネスコ（UNESCO）の世界遺産でもあるカジランガ国立公園（Kaziranga National Park）に隣接していることから、茶園を 2011 年にオーガニック農法に切り替えました。アッサム州の言葉で「Hathi」（ハティ）とは象、「Kuli」（クリ）とは Frequent「頻繁な」という意味。国立公園が隣接しており、象がしばしば訪れるというところからこの名前がつけられた、ユニークな茶園です。

ハティクリ茶園はインド最大の財閥、ＴＡＴＡグループ（Amalgamated Plantation）によって経営されています。働く人々の福利厚生が充実しており、無料で教育・医療が受けられる恵まれた環境です。最新の医療が無料で受けられることで、働く人が安心して仕事に専念することができます。広い茶畑の中では、胡椒や様々なハーブも育てており、それを収穫することにより人々の副収入になりま

＜アッサムハティクリ茶園の茶摘み女性＞

す。また、茶畑の中にいくつもある人工池では、魚が養殖されており、稚魚を育てマーケットで売ることで副収入を得られる仕組みになっています。すべての設備投資はハティクリ茶園が行い、会社が全面的に人々の生活を支援しています。日本では近年ＣＳＲ（企業の社会的責任）が叫ばれていますが、インドでは財力がある企業はスケールの大きい社会貢献をしています。

ハティクリ茶園では 2011 年にすべての茶畑を土、植物、動物、すべてが関連しあえる環境作りのオーガニック農法に切り替えました。周りのジャングルから集めたハーブの抽出液でつくられた独自の調合剤や、虫によってつくられた肥料を使用して、独自のオーガニック農法を実践しています。微生物が棲む土、土から育てられる植物、そして植物を食べる動物すべてがお互いに関連しあえる環境作りに力を入れています。茶園には隣接する国立公園から象が来るだけでなく、人々に飼われている羊や野生の牛たちが自由にはいり、その糞が豊かな土づくりに貢献しています。

＜ハティクリ茶園を訪れる象＞

最年少の凄腕マネージャー、チャンドン氏は 35 歳の若さでマネージャーにスカウトされました。茶園経営では有能なマネージャーを確保することが最も重要です。働く人々の意見にも耳を貸し、常に新しい技術を紅茶づくりに導入しています。

3. ニルギリ ティー

南インドにあるニルギリ地方は、タミル・ナードゥ州北部、高原地帯に囲まれた南インドで最も有名な避暑地でした。19 世紀初め、インドを統治していたイギリス人が当時のマドラス政庁を夏の間に移転させるために築いた街です。

ニルギリは現地語で青い山（ブルー・マウンテン）。その名の通り、高原地帯の美しい景色が広がっています。ダージリンと同じように、イギリス人がここに茶畑をつくったのがニルギリ紅茶の始まりです。ニルギリ紅茶の特徴は、あっさりとしてクセのないことです。気候条件が近い、セイロン紅茶によく似ていて、日本人にはなじみの深い味で、ブレンドやアレンジティーの茶葉として利用されることが多いです。茶園としての長い歴史があり、ニルギリ地方では数少ないバイオダイナミック農法を実践し、茶園で働く人の子供の教育に力を入れている経営方針が大変ユニークなのがコーラクンダ茶園です。

【コーラクンダ茶園　Korakundah Tea Estate】

コーラクンダ（Korakundah）茶園はニルギリ地方では数少ないバイオダイナミック農法を実践しています。標高 2800 メートルに位置し、茶園の一部は「世界一標高の高い紅茶園」としてギネス認定されているほどです。

＜コーラクンダ茶園茶摘み女性＞

930 ヘクタールもある敷地のうち、茶畑は 268 ヘクタール。残りの三分の二は原生林のまま残し、トラやヒョウ、鹿をはじめ無数の動物が生息。最近では象も姿を見せます。土づくりに力を入れ、1 ヵ月かけて微生物による堆肥づくり（ワーミーコンポスト）、70 日間かけて牛糞やシリカ、鉄分を使用したバイオダイナミック農法の堆肥づくりを行っています。また防虫剤として硫黄やライムを使用し、葉にまくことによって雨期には害虫であるレッド・スパイダーをよせつけません。標高が高いので防風林のために多くの木や植物を植えているのも特徴です。美味しい紅茶がつくられる素晴らしい自然環境が整っています。

＜敷地内の虎についての注意書き＞

＜コーラクンダ茶園小学校風景＞

コーラクンダ茶園オーナーは財閥で、４つの紅茶園を経営しています。1800 年代後半から茶園経営が始まりましたが、スタートの頃はその地域に住んでいた部族の人が働いていました。1922 年に現在の財閥オーナーとなってからは、希望すれば誰でもこの茶園で働くことができ、いつ退職しても問題なしという画期的なシステムをつくりました。

ここで働く人は教育費、住居費、給食費その他すべて無料。働いている人たちを大切にしていることがわかります。この紅茶園出身の子どもたちは優秀でインドの大学共通一次試験トップクラスを毎年多数輩出しており、今では世界中でこの紅茶園出身の子どもたちが活躍しています。茶園に問題がおこると弁護士、医者、大学教授…と、卒業生が解決してくれます。南インドの人は優秀な人材を多く輩出していますが、その背景には恵まれた教育環境があることは間違いありません。

＜インド三大銘茶のご紹介を終えて＞

世界史を紐解くと、歴史が大きく動いたときに紅茶がその背景にありました。アヘン戦争やボストン茶会事件はその代表です。それだけ人々を魅了し続けてきたのが紅茶です。現代でも人々の生活にはコーヒーと並び、紅茶は欠かせない飲み物になっています。

最近は、フェアトレード貿易やオーガニックという言葉がでてきたように、第三国の生産者の生活向上を考え、消費者側の意識も変わってきました。紅茶づくりは労働集約型で、今の若い人々は茶園で働くことを望みません。茶園で働く人々の高齢化がインドでも進み、茶園経営者たちにとって大きな問題になっています。また、近年の異常気象も紅茶の生産量に大きな影響を与えています。今後、美味しい紅茶が安定的に生産地から届かなくなる危険もあるのです。

今回、そのような状況の中でも、インドを代表する三大銘茶（ダージリン、アッサム、ニルギリ）のオーガニック農法でユニークな経営をしている茶園をご紹介しました。大国のインドだけあり、経営者の理念・哲学は素晴らしく、生産者を大切にし、Sustainable な経営を実践しています。紅茶は農作物。ワインと同じように産地、作り手、茶樹、製造方法などによって味・香りが大きく異なります。紅茶にも四季があり、旬の味を楽しめます。そして紅茶はワインのぶどうと同じように、製品になるまで一度も洗われることがありません。だからこそ、農薬・化学肥料を使用せずにつくられた紅茶が最近注目を浴びています。

これからは、紅茶を買う私達もただのバイヤーとしてではなく、生産者のパートナーとして、フェアトレードに代表されるような公正な貿易、環境を配慮した消費スタイル、そして生産者が取り組んでいることに貢献していかなくてはなりません。そのためにもっと生産者のこと、そして紅茶のことを知ることがまず大切であると思います。一杯の紅茶がつくられる背景には、歴史があり、多くの人々の手がかかり、そして思いが詰まっているのですから。この拙文が、紅茶そして生産者を知るきっかけになっていただければ幸いです。

＜摘まれたばかりの茶葉＞

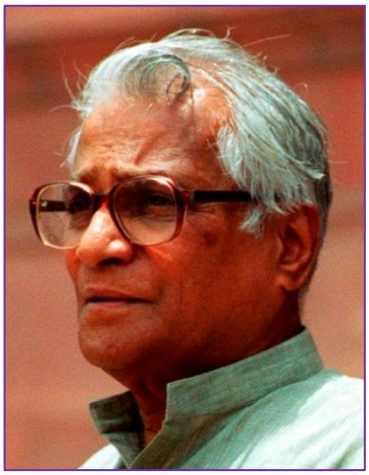
4. ジョージ・フェルナンデス元インド国防大臣を偲んで
In Memory of the former Defense Minister of India, Mr. George M. Fernandes

日印協会 理事長　平林 博

1998 年 3 月からのインドのバジパイ内閣（インド人民党中心の国民民主連合―National Democratic Alliance 内閣）で国防大臣を務めたジョージ・フェルナンデス氏が、1 月 29 日、逝去されました。享年、88 歳。

駐インド日本大使として多くの接点を持った筆者はこの訃報に接して、同氏を悼んで偲び、少しでも多くの人々に紹介したいと考えて下記を記すことにしました。

筆者が駐インド大使であった 1998 年から 2002 年までの間、フェルナンデス氏は筆者が最も尊敬し親しく付き合った政治家で、バジパイ内閣で一貫して国防大臣を務めました。さらに、NDA は 18 内外の中小政党が連立を組んだ内閣でしたが、フェルナンデス大臣は、1994 年に Janata Dal（人民党）を解消して設立した Samata Party の総裁となり、NDA 政権では、諸政党の調整役 Convenor を務め、とかく利害の一致しない連立諸政党の団結を確保しました。まったく飾り気のない政治家で、庶民が日常着るラフな服装で、庶民目線でモノを考える政治家でした。チベットが中国に侵略されたことに怒り、チベット人のインド亡命を支援し、同じ考えを持っていた野呂田芳成衆議院議員（防衛庁長官などを歴任)とともに、チベット人支援に熱心に取り組まれました。また、労働者の味方をもって任じボンベイでは多くのストライキを含めた労使紛争を指導し、鉄道大臣としてはインド南西部のコンカン鉄道建設を進めました。



＜ジョージ・フェルナンデス氏、2002 年撮影（Wikimedia)＞

筆者が駐インド大使として着任した 2 か月後の 1998 年 5 月、インドは核実験を強行しました。核実験の立役者の一人でしたが、本来は核兵器反対論であり、また「超」のつく親日家でした。わが国はこれに抗議し、新規の政府開発援助（ODA）も停止しました。核実験に抗議する筆者に対し、フェルナンデス大臣曰く。「インドの核実験は中国の核に対する抑止力を示すために已むに已まれず行ったものであり、本来は核兵器には大反対である。日本が唯一の核兵器被災国として抗議する気持ちは十分理解するので、米欧など諸外国の経済制裁などには反発するが、貴大使の抗議や日本政府による政府開発援助（ODA）の停止措置については甘んじて受ける。」(注 1)

ある時、フェルナンデス大臣は、筆者との話の中から、上野動物園に子象を送ることになりました。筆者が日印関係の話をした際に、一つの逸話を紹介しました。

「太平洋戦争中に上野動物園の象や猛獣が米軍の爆撃の際に脱出して人々に危害を加えるようになることを防ぐために、彼らを毒殺せざるを得ませんでした。終戦となり、廃墟と化した東京の上野動物園の界隈の子供たちが何とか象を見たいと念じ、ネルー首相に手書きで直訴したところ、首相は娘（将来のインディラ・ガンジー首相）の名をとってインディラと命名した子象を寄贈してくれました。その際に立ち会ったインド代表の令嬢がいたが、何を隠そう、その方は現在貴大臣の奥様役のパートナーとなっているジャヤ・ジャイットリー女史なのです。その後、インディラ象がなくなると、すでに首相となっていたインディラ・ガンジーさんはたいそう悲しんで、「アーシャ(希望)」と「ダヤー(慈悲)」と命名した 2 頭の子象を送ってくれました。現在、この 2 頭が、上野動物園で観客に愛嬌を振りまいています。」と紹介しました。

フェルナンデス大臣は自分のパートナーがそのような経歴を持っていたとは知らなかったらしく、大変驚くとともに、自分も子象を寄贈したいと言い出しました。筆者は上野動物園に相談した結果快諾を得たので、大臣からの象の寄贈が決まりました。大臣は、選挙区のあるビハール州で子象を調達しました。大臣から筆者に対し、

どのような名前を付けようかと相談がありましたが、筆者は「大臣の子象だから大臣自身が命名するべきだ」と伝えたところ、しばらくしてから「スーリアではどうだろうか。スーリアは、ヒンズー教の太陽神であるので『Rising Sun 日出る国』にふさわしいのではないか。」と提案してきました。筆者は、一も二もなく賛成しました。こうして、現在、上野動物園には3頭のインド象（プラス1頭のタイからの雄象）がいるのです。(注2)

2001年12月、ジャンム・カシミール地方で越境テロを繰り返していたパキスタンは、ついにデリー中心部のインド国会議事堂にテロリストを送り込んできました。国会議員に死傷者は出ませんでしたが、衛視数名が死亡しました。それまでは、頻繁に繰り返されるパキスタン支配のカシミール地域から越境テロがあっても、インドは局地的に反撃するにとどめてきました。しかし、インドが誇りに思っている民主主義の殿堂が攻撃されたため、インドは腹をくくりました。本格的に軍に対する総動員令を発しました。2002年の初めから数か月間戦争準備が行われ、最盛期には50万人のインド陸軍がパキスタン国境とカシミール地方に送られ、ムンバイなどからは数十隻の艦船がパキスタン沖に展開しました。空軍も戦時体制でした。1998年の核実験で核兵器を保有することを明らかにしていた両国でしたので、戦争が始まれば、通常兵器での戦いが劣勢なパキスタン軍を核使用に向かわせ、インドは核で報復するという恐れがありました。

日本を含む諸外国は何とか戦争を回避させようと両国に働きかけました。筆者は、フェルナンデス国防大臣を含めてインド政府に働きかけました。小泉純一郎総理や川口順子外務大臣も先頭に立ちました。筆者は邦人保護の観点から、インドに在留する邦人に対し、順次国外ないしデリーから離れたインド各地に避難するように勧告を出しました。結局、諸外国の説得が聞いて戦端は開かれずに終わりました。この間、フェルナンデス大臣がどのように考えていたか、過ごしていたか、聞くチャンスは逸してしまいました。(注3)

外務省を退官後、筆者は、日印協会会長となっていた森喜朗元総理の要請で、理事長を引き受けました。年に数回インドに行くことになりましたが、いつも、フェルナンデス元大臣に再会したいと思っていました。

しかし、デリーの日本大使館からの情報によると、フェルナンデス元大臣はアルツハイマー病に侵され、外部の人は面会できないとのことでした。ところが、ある時、面会の要請を伝えてもらったところ、夫人（ジャヤさんではなく正夫人）から、平林元大使なら自宅に来て会っていただいてもよいとの回答がありました。筆者は、どうしたら記憶喪失した元大臣から平林だと認めてもらえるか、考えました。結論は、元大臣が寄贈したスーリア象の写真を持参し、元気でいることを伝えようと思うに至りました。

デリー市内のフェルナンデス邸では夫人が出迎えてくれました。早速、寝室に通されました。元大臣は、質素なベッドに寝ておられました。夫人の許しを得てベッドに近寄り、耳元に口をつけんばかりに大臣の名前を呼び、平林だと告げました。反応が鈍いので、相当の大声を出しました。そのうえで、スーリア象の写真を持ってきたので見てほしいと、声を大にして頼みました。反応はほとんどありませんでしたが、心なしか、スーリア、スーリアと耳元で唱えていたら、反応があった気がしました。夫人にお見舞いの意を告げ、また特別の面会に謝意を表して辞去しました。あの活発な元国防大臣の変貌ぶりには大変心が痛みました。その後も、年に2回はインドを訪れますが、フェルナンデス元大臣の消息を聞きことはありませんでした。事柄の性質上、病床にあったフェルナンデス元大臣との会見については外に出すことはなく胸に収めてきました。

本日、インドの新聞を読んでいたらフェルナンデス元大臣の訃報が伝えられていました。筆者にとっては、思い出の多いインド政治家でありますが、ご逝去は、大使と理事長を合わせて15年になるインドとの関係に大きな一区切りをつけたように感じます。本稿をもって、筆者の心からの哀悼の辞としたいと考えます。

フェルナンデスさん、安らかにお眠りください。合掌。

(注1～3) 詳細は、拙書「最後の超大国インド：元大使が見た親日国のすべて」をご参照

5. インドニュース(2019年1月)
News from India

1. 内政

【連邦政府/連邦議会】

1月10日:チョウハン前マディヤ・プラデシュ州首相、シン前チャッティースガル州首相、ラジェ前ラジャスタン州首相がＢＪＰ副総裁に就任した。

1月19日:コルカタにおいて、全印草の根会議派(ＡＩＴＣ)主催の反ＢＪＰ野党による大規模集会が開催された。集会には、ヤーダブ社会主義党(ＳＰ)党首、ナイドゥ・テルグ・デサム党(ＴＤＰ)党首、カルゲ・コングレス党幹事長、ミシュラ上院議員(大衆社会党(ＢＳＰ))含む20以上の野党の幹部等が参加した。これに対し、モディ首相は、インドを食い物にする(looting)ことができなくなった者たちの連合であり、反モディではなく反国民の連合であるとして批判した。

1月22日:シャーＢＪＰ総裁は、西ベンガル(ＷＢ)州マルダにおける集会で、1月19日に実施された野党合同集会に参加した各党指導者のうち9人が個人的利益のために首相となることを望んでおり、野党連合はまとまりがないとして批判した。

モディ首相は、ヴァラナシにおける集会で、コングレス党が長年に亘り汚職の問題を放置してきたとして批判し、ＢＪＰは4年半で汚職の根を85%掘り起こしたと述べた。

1月23日:プリヤンカ・ガンディー・ヴァドラ(ラーフル・ガンディー・コングレス党総裁の妹)がコングレス党幹事長に就任した。

1月28日:ラーフル・ガンディー・コングレス党総裁は、ライプルにおける集会で、コングレス党が政権を樹立すれば、貧しい全ての人々に対しベーシック・インカムを導入すると述べた。

1月29日:連邦議会の予算国会が開会した。

1月30日:モディ首相は、スーラトにおけるイベントでの演説で、単独過半数を有し、強く大きな決断のできる強力な政権が樹立できるようにと有権者に支持を訴えた。

シャーＢＪＰ総裁は、ラクナウにおける集会での演説で、ＢＪＰが「強い」政府を望んでいるのに対し、野党連合は「しようのない(helpless)」政府を望んでいるとして批判した。また、仮に野党連合が政権を樹立した場合、日替わりで首相が交代するであろうと揶揄した。

2. 経済

【インド経済(金融安定性報告書(Financial Stability Report)(2018年12月)の公表)】

2018年12月31日:インド準備銀行(ＲＢＩ)が、金融安定性報告書(Financial Stability Report)を公表した。今回公表された統計では、商業銀行(scheduled commercial banks:ＳＣＢ)における総不良債権比率(gross non-performing-assets:ＧＮＰＡ)は、2018年9月時点で10.8%となり、2015年3月以降初めて同比率が低下することとなった。

3. 外交

【第4回ライシナ対話[1]】

1月8日－10日:第4回ライシナ対話がニューデリーで実施された。

[1] ライシナ対話:インド政府が旗艦事業として全面的に支援する国際会議であり、印外務省とインド主要シンクタンクであるオブザーバー・リサーチ基金(ＯＲＦ)が共催し、2016年以降首都デリーで毎年開催。主にインドを含む南アジア、ＡＳＥＡＮ、欧米諸国が直面する諸課題を議論しており、例年、地域内外から外交・防衛に関わる閣僚・政府関係者や有識者が出席する等、国際的な関心も高い。

【印スペイン関係】
1月7日－10日:ボレル・スペイン外務・ＥＵ・協力大臣はライシナ対話出席のために訪印し、スワラージ外相等と会談した。
【印モンゴル関係】
1月7日－11日:ツォグトバータル・モンゴル外務大臣が訪印し、ライシナ対話のサイドラインでスワラージ外相と会談した。
【印マレーシア関係】
1月9日－10日:アンワル・イブラヒムＰＫＲ党首は、ライシナ対話のサイドラインでスワラージ外相と会談(9日)したほか、モディ首相を表敬(10日)した。
【印ネパール関係】
1月10日－11日:ギャワリ・ネパール外務大臣はライシナ対話出席のために訪印し、スワラージ外相と会談した。
【印パキスタン関係】
1月18日:印外務省報道官は、パキスタンによる「インドはアフガニスタンにおいて果たす役割はない」とのステートメントについて、コメントを発表した。
【印南アフリカ関係】
1月25日－26日:ラマポーザ南アフリカ共和国大統領は、26日に行われた第70回共和国記念日パレードの主賓として、初めてインドを公式訪問した。

4. 日印関係

1月7日－9日:河野外務大臣がインドを訪問した。

今月の注目点(その1):第10回日印外相間戦略対話(概要)
インドを訪問中の河野外務大臣は、7日(月曜日)、午後7時(現地時間)から約40分間、スシュマ・スワラージ・インド外務大臣(H.E. Mrs. Sushma Swaraj、 Minister for External Affairs)と第10回日印外相間戦略対話を行ったところ、概要は以下のとおりです。
1.冒頭
スワラージ外務大臣から、大臣の訪印を歓迎するとともに第10回目となる日印外相間戦略対話をデリーにて開催でき嬉しい、2018年のモディ首相の訪日は多くの成果があり成功であった、今回の会合が2019年のスタートであり、日印関係を幅広い分野で一層強化していきたいと述べました。
これに対して河野大臣から、大臣として初めて訪印することができて嬉しい、昨年10月のモディ首相訪日では日印両国が特別な関係であることを示すことができた、インドは自由で開かれたインド太平洋を実現する上での最重要パートナーであり、地域や世界の平和と繁栄を主導していきたい旨述べました。
2.二国間関係
(1)総論:河野大臣から、本年は日本がG20主催国であり、モディ首相やスワラージ大臣の訪日を楽しみにしている、また、本年は安倍総理が訪印する順番であり、2019年が日印関係深化にとって実りあるものになるように外相間で協議していきたい旨述べました。
これに対し、スワラージ大臣から、G20議長国である日本をインドとしてサポートしていく旨述べられました。
(2)安全保障:河野大臣から、両国の安保防衛協力を更に推進していく上で、昨年10月の日印首脳会談で合意した閣僚級2+2を本年中の可能な限り早期に開催したい、宇宙対話及びサイバー協議の早期開催に向けて調整を進めていきたい旨述べました。
これに対し、スワラージ大臣から、閣僚級2+2を早期に開催したいと述べた上で、宇宙対話、サイバー協議の早期開催とともにいわゆるACSA[2]の早期交渉開始について言及がありました。
(3)経済:河野大臣から、昨年12月の3件の円借款供与に係る交換公文署名を歓迎する旨述べました。

[2] ＡＣＳＡ:物品役務相互提供協定(ACSA: Acquisition and Cross-Servicing Agreement)は、自衛隊と外国の軍隊とが物品・役務を相互に提供する際の決済手続等の枠組みを定めるもの。

スワラージ大臣からは、日本企業によるさらなるインドでの投資への期待が示されました。

(4)人的交流

河野大臣から、今般、インドを代表する有識者や企業家から構成される印日友好フォーラムが立ち上げられたことを歓迎し、こうした日印間の人的・文化交流が一層進むことを期待する旨述べ、人的交流の拡大の重要性について両者で一致しました。

(5)連結性強化

河野大臣から、日印双方の自由で開かれたインド太平洋に向けたヴィジョンの実現に向け、第三国やインド北東州での協力の重要性について確認し、特にアクト・イースト・フォーラムを通じた協力の具体化を引き続き行っていくことで一致しました。

3.地域情勢及びグローバルな課題

両外相は、北朝鮮を含む地域情勢や G20、安保理改革、軍縮不拡散、RCEP 等のグローバルな諸課題について意見交換を行いました。

今月の注目点（その2）：河野外務大臣によるモディ・インド首相表敬（概要）

7日（月曜日）、インドを訪問中の河野外務大臣は、午後8時10分すぎ（現地時間）から約25分間、ナレンドラ・モディ・インド首相（ H.E. Mr. Narendra Modi、 Prime Minister of India ）を表敬したところ、概要以下のとおりです。

1.冒頭、モディ首相から、河野大臣の訪印を歓迎する、友人である安倍首相と日本国民の皆さんに対して、あけましておめでとう、と伝えたいと述べました。

2.河野大臣から、以下のとおり述べられました。

(1) 昨年10月のモディ首相訪日以来、再度お会いすることができ嬉しい。

(2) インドは自由で開かれたインド太平洋を実現する上での最重要パートナー。地域や世界の平和と繁栄を主導していきたい。

(3) 本年は日本がG20主催国であり、昨年に続くモディ首相訪日を楽しみにしている。首脳間の相互訪問により本年は安倍総理が訪印する順番であり、安倍総理の訪印が実りあるものになるように調整していきたい。

(4) 安全保障・防衛協力を進めるため、閣僚級 2+2、ACSA 交渉、宇宙・サイバー協議の早期開催に向けて調整を行い、また、印日友好フォーラムを活用して人的交流を強化していきたいと述べました。

最後に、印日友好フォーラム（India Japan Friendship Forum）は、芸術や文化、知的交流などを通じた日印間の相互理解の推進、インドにおける対日理解の促進、日印間の人の交流の促進を目的とし、先月新たに立ち上げられたフォーラムとなります。ワドワ元駐日大使が会長を務め、有識者や企業家から構成されています。

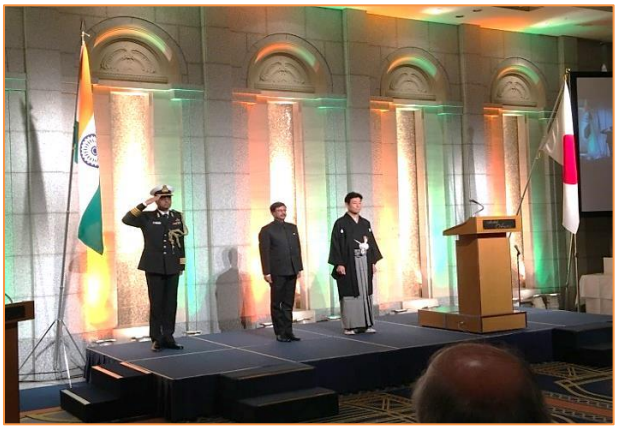
3.モディ首相からは、G20への出席、安倍総理の訪印を楽しみにしているとの発言がありました。

4.また、河野大臣とモディ首相は、地域情勢について幅広い意見交換を行い、今後も引き続き緊密に連携していくことで一致しました。

6. イベント紹介
Japan-India Events

◇ 最近のイベント ◇

◆ 第 70 回 インド共和国記念日式典 in TOKYO　“गणतंत्र दिवस की बधाई हो !”


<国家演奏：左 Verma 大使、右 西村内閣官房副長官>

1 月 28 日（月）12:00 より、ホテル・オークラにおいて Sanjay Kumar Verma 駐日インド大使主催のインド共和国記念日レセプションが、日印双方の政財界をはじめとする各界から多数のご来賓の出席を得て、盛大かつ厳かに執り行われました。

式典開催前、会場入り口には、Verma 駐日大使夫妻はじめ首席公使、駐在武官などがご夫人と並び、来賓者一人ひとりと握手をしながら言葉を交わしました。開会式では印日両国の国歌演奏の後、日印友好議員連盟副会長兼事務局長でもある西村康稔 内閣官房副長官が共和国記念日のお祝いのスピーチをされ、大使が答礼の挨拶をされました。70 年を迎えた共和国記念日を祝し、日印の音楽チームがガンディーの母語であるグジャラート語での楽曲の発表をし、会場を盛り上げました。

<日印の音楽チームの演奏を楽しむ来賓者>

共和国記念日(1 月 26 日)はインド憲法が発布され、共和国となったことをお祝いする日であり、本国の首都、デリーの中心部に位置するインド門と大統領官邸を結ぶラージパト通りでは、毎年盛大なパレードが行われます。このパレードでは、インドが誇る軍事力や多様な産業・文化が色鮮やかに表現されます。70 周年を記念する今年は、シリル・ラマポーザ南アフリカ大統領が主賓として招かれました。

◆ マハトマ・ガンディー翁生誕 150 年記念『内幸町天竺祭』

2 月 9 日に千代田区立内幸町ホールで開催された『内幸町天竺祭』は大盛況でした。三時に到着してインド料理楽しむ人達をかき分けてホールに入ると席はすでに満席で、ホールの両脇や後方でも多くの人が立ち見状態。すぐにインド大使館 VCC 所長シッダールト・シン教授は『マハトマ・ガンディーの環境哲学』の講演がはじまり、その後、その場でできるヨガを体験し、カタック、北インド古典音楽、南インド古典音楽、バラタナティヤムを楽しみインド小旅行気分を内幸町ホールで味わいました。

<バラタナティヤム(南インド古典舞踊)>

<来場者も参加するヨガ体験>

インドを語る集い＜様々なインド＞

『特別企画！インドの叡智展、学芸員説明付きツアー』

今回は、「様々なインド」を日印協会事務所の外で開催します。

東京駒込・東洋文庫で開催中の「インドの叡智展」を、学芸員の解説付きで分かり易くお楽しみいただけます。奮ってご参加ください！

開催日時：2019 年 3 月 18 日（月）15:30～16：30

（集合時間・場所、15:20　東洋文庫ミュージアム 入口）

終了後 16:30～17:30 に東洋文庫オリエント・カフェでお茶会を開催します。

会　場：東洋文庫ミュージアム

東京都文京区本駒込 2-28-21

参 加 費：日印協会会員（無料）、非会員（500 円）、お茶会のお支払は自費

＊入場券は協会が一括して用意しておりますので、ミュージアム入口にてお配りします。

募集人数：約 20 名（先着順）

＊同封のチラシの参加申込用紙で、ファックスかメール、電話で事務局にお申込み下さい。

◇今後のイベント◇

◆　ナマステ福岡 2019　　4 月 13 日（土）～　4 月 14 日（日）

ナマステ福岡は、在日インド人達による手作りのイベントです。ステージでは、インドの多彩な文化を紹介する伝統芸能や、様々なパフォーマンスが披露され、無料体験コーナーでは、ヨガやヘナアート、民族衣装のサリーを体験できます。インド料理やインド雑貨などの販売もあります。九州地方における大規模インド・イベントの先駆けです！

場 所：天神中央公園（福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 1）

日 時：2019 年 4 月 13 日（土）10:00～19:00、14 日（土）10:00～18:00

入 場：無料

主 催：ナマステ福岡実行委員会、後援：日印協会、他

「Namaste Fukuoka」の Facebook ページでも詳細がご覧いただけます。

◆　『インド、独り舞ふ Vol.6』4 月 16 日（火）、4 月 17 日（水）
Indian Classical Dance Solo Act 2019

毎年恒例のインド古典舞踊の公演が行われます。

場所：南青山マンダラ　http://www.mandala.gr.jp/aoyama/index.html

日 時：4 月 16 日（火）、4 月 17 日（水）

出演予定：入野智江ターラ(Kutiyattam)、仲香織、篠原英子、毛塚七重（Odissi）

富安かなめ、小川さやか、平林千亜紀（Bharatanatyam）、

丸橋広実(Mohinitayattam)

前田あつこ、菊地やよい、谷口岳大（ Kathak)

料金：ご予約 3,000 円、当日 3,500 円　*各日要 1 ドリンクオーダー

主催：カダムジャパン　http://www.atsukathak.com/

後援：日印協会、他

7. 新刊書紹介
Books Review

§『模倣と革新のインド製薬産業史―後発国のグローバル・バリューチェーン戦略―』
ISBN978-4-623-08236-0
著者：上池あつ子
出版社：ミネルヴァ書房
価格：本体 7,000 円＋税

本書は、産業育成の過程や、アメリカや日本の製薬市場をも瞰する中で、高い国際競争力を持つに至ったインドの製薬産業の発展の要因を紐解いている。

序章　インドの経済開発戦略の変遷と製薬産業の発展、第１章　インド製薬産業の概観―貿易・産業構造・空間構造―、第２章　製薬産業の発展―長期的発展の要因―、第３章　医薬品価格規制―産業発展の視点から―、第４章　模倣と革新の融合、第５章　インド製薬企業の発展―企業の能力の形成―、第６章　インドと米国、第７章　インドと日本―投資の拡大と課題―、第８章　医薬品アクセスと産業発展―知的所有権と外資規制―、終章　インド製薬産業の発展と今後の課題

§『インドの思想』（ちくま学芸文庫）
ISBN978-4-480-09872-6
著者：川崎　信定
出版社：筑摩書房
価格：本体 1,000 円＋税

あとがきによると、本書は、著者が放送大学の教科書として作成し、授業担当を終了した後も、街の一般書店の棚に並び、刷を重ねて九刷なった本の文庫版です。道理で内容に偏りがなく、幅広くインドの主要思想がわかりやすく入門者用に説明されていると感じました。もっと知りたい、学びたい読者には充実した注記と参考文献リストが役立ちます。

8. 掲示板
Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

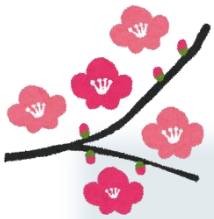
次回発送は、2019年4月19日(金)を予定しております。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

＜編集後記＞　今月の表紙は発展しつつあるムンバイを象徴する海上高速道路としました。これはムンバイ北部の空港からダウンタウンに通ずる悪名高い混雑道路を迂回する目的で建設されたバイパスで、全長5.6Kmに及ぶ近代的な高速道路です。インド各地においてこのような近代化が図られつつありますので、古いインドのイメージを修正していただく必要がありますね。　(編集子)

【日印協会からの重要なお知らせ】

日印協会ホームページの会員パスワードを2019年5月1日に変更いたします。

新しいパスワードは2019年4月15日発送予定の次号月刊インドに同封いたしますので、忘れずに開封をお願い致します。



本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます

入会随時受付中

日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の3名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人・個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費: 個人	1口(8,000円)から	☆入会金	個人 2,000円
学生	1口(4,000円)から		学生 1,000円
一般法人会員	1口(100,000円)から		法人 5,000円
特別法人会員	1口(150,000円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド Vol.116　No.2 (2019年2月15日発行)　　発行者 平林博　　編集者 西本 達生
発行所　公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604　　Fax: 03-5640-1576　　E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: https://www.japan-india.com/